

総合地球環境学
研究所副所長・教授

佐藤洋一郎

時評

かつてはその大半が緑の大地であったシルクロードは、中央アジア以東の東半分では砂漠の中に消えてしまった。その当時の姿を復元するのが目下の私の関心事のひとつだが、砂漠をおおう多量の砂の威力にはいつも脅威を感じている。タクラマカン砂漠にある小河墓遺跡を、今



年もまた訪れた。京都を早朝発って現地に着くのはどんなに急いでも三日目の午後。下手をすれば三日目の夜は砂漠で野宿となる。

流砂はあらゆるものを埋め尽くす。昨年通った道は高さが一〇センチを優に超える砂山に埋まり跡形もない。今年はまた新たな

砂漠化の脅威

道を開拓するよりない。しかも累々と続く砂山は視界をさえぎり、中国側の隊長は砂山を駆け上っては方向を確かめている。今年はずっとに新砂が多く、旅は難渋した。

新砂の砂山は難物で、いったん足をとられると、専用の砂漠車でも動きが取れなくなる。砂

が、この高速道路にも砂の魔手が伸びてくる。舌のように伸びる新砂の薄膜に乗り上げれば、車輪はたちどころにスリップし、大事故を招く。

水さえあれば砂漠など克服できると考えるのは大間違いだ。砂がもつ強い塩分があらゆる植物を受け付けない。下手に水な

相手ではある。今年も調査中に県下在住の叔父が亡くなった。訃報を聞いたのは調査の帰路、ベースキャンプに戻ったときだった。通夜も葬儀も終わっていた。若いころから何かとかわいがってくれた人だったので、いいようのない感情に襲われた。万一のときのために衛星携帯

電話も持参しているのだが、仮に砂漠中で訃報に接したところで、どうせ葬儀にも何にも間に合わないのだと自分を慰めるのがやっとだった。

人間の行為に因果ある

山と砂山の間谷間に溜まった新砂はまるで魔物のようだ。ひとたび判断を誤れば、砂漠車でもまるで蟻地獄のようなこの谷からは二度と抜け出すことほできかない。

だから最低でも二台一組で行動することになっている。遺跡まで直線距離にして三〇キロのところには高速道路も走っている

ど入れようものなら、あたりは塩水の原野と化す。それに、天山山脈の雪解け水は土石流ならぬ砂流となって高速道路の路床を洗い流し、電柱をなぎ倒してしまふ。頑丈な石造りの堰を作ってそれを防ごうとするが、堰も一回の洪水で砂

に埋まり、毎年工事が必要になる。とにかく砂漠とは手ごわい廻っているのだと思っ

大砂漠という自然の前に、改めて人間の無力さを感じた旅でもあったが、砂漠化の少なうとも一因は過去の人間の行為にあるともいわれる。やはり因果は

廻っているのだと思っ

◇さとう、よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。